## 《第6号》***インパクトファクターについて知りたい！！***

自然科学分野の研究者の間でインパクトファクター(＝IF)という響きに敏感にならない人はいないのでは?!というほど今やIFは、研究者の間に浸透しています。しかし、このIFについて興味はあるが詳しいことがわからない、といった方のために今号から3回に分けて、IFの概要をお伝えします。

はじめに､IFはアメリカのEugene Garfield氏(＝G氏)が1963年に文献引用索引Science Citation Index(＝SCI)を創刊し、その引用索引に蓄積されたデータをまとめる過程で提案されたものです。1975年にはIF値を含む引用指標をまとめたJournal Citation Reports(＝JCR)が創刊され、学術雑誌の増加と予算の問題に直面し始めていた図書館界において、雑誌購入の基準や評価の目安として主に利用されるようになりました。当時からG氏はIFの使われ方として、個人の研究業績の評価に利用すべきでないと明言しており、今日のような使われ方がされ、強く批判しております。この点については次号｢インパクトファクターの誤用について｣で詳しくお伝えします。

では、IFの算出方法ですが、〔当該雑誌の直前2年間に発表された論文がその1年間に発行(かつSCIで採録)されたすべての雑誌に引用された総件数〕を〔当該雑誌の直前2年間に発表された論文の総件数〕で割った値のことですが、具体的に2003年を例にし、算出式に当てはめてみます。

$$\text{IF2003年} = \frac{\text{被引用回数(2001年と2002年論文の2003年への引用)}}{\text{出版論文数(直前2年間、2001年と2002年)}}$$

上記の算出式からもわかるように、IF値は直前2年間のデータに限定されております。1論文あたりの引用回数を示すものがIFであることを知っていても、このように限定されたものであることを知っている方は意外に少ないのではないでしょうか。しかし、この方法で算出した結果、レビュー誌においてのIF値が高く、原著論文や、創刊して間もない歴史の浅い雑誌はIF値が低いなどの結果になり、レビュー誌と原著論文を同格にして単純比較するのは適切ではないといえるでしょう。実際にJCRの最新版(2003年版)でも、上位10誌の中にレビュー誌が6誌、50位中でも20誌ランクインされており、レビュー誌が高値であることがわかります。また、ランキングされている雑誌の中には、学会のプログラムや抄録が主になっていて、4～5編の著名な研究者の講演論文を掲載し、この限られたソース論文だけがその雑誌の引用の対象となり、IF値が高くなっていることもあります。また、自然科学の分野において、よく読まれている雑誌でも参考文献に引用されないことが多々ありますが、引用が少なくても重要なものがあることを忘れることはできません。

以上のことを踏まえて、引用回数の多い論文が各分野の発展に貢献しており、それがインパクトの高い研究といえると同時に、研究者が雑誌に投稿する際の参考にして頂きたいと思います。

＜参考文献＞

Garfield,E：How can impact factors be improved？　BMJ ,313:411-413, 1996　< M2階>
山崎茂明：インパクトファクターを解き明かす 東京,情報科学技術協会,2004　<002.7/Y48>
山崎茂明：生命科学論文投稿ガイド　東京,中外医学社,1996　<W18/Y48＞
山崎茂明：インパクトファクターの論点　クリニカルプラクティス,23(11):1126-1129,2004

*今号を読んで疑問に感じた点、興味を持ったこと等ございましたら、3階カウンターかメールでこちらまでunyo@lib.iwate-med.ac.jp　次号以降で回答したいと思います。

＊ ＊図書館トリビア＊＊＊

図書館3階の廊下には「ご自由にお持ちください」用テーブルがあります。蔵書としないパンフレット、雑誌類、寄贈図書や、除籍した図書などが置かれ、年末にはカレンダーや手帳などが人気です。意外な掘り出し物が見つかるかもしれないこの“図書館版無料フリーマーケット”来館の際にチラッとご覧ください。　　今年も図書館、メルマガともよろしくお願い致しますm(_ _)m